

「卒都婆小町」推量

田口和夫

『三国伝記』と小町物のかかわりについて前稿で報告したときにふれた事ではあるが、以来疑問がますますばかりなので、あまり学問的ではない推測をのべて御示教をこいたい。

「卒都婆小町」は『申楽談儀』に「小町観阿作」とあることから観阿弥作であることは確実視されている。しかし、その他の観阿弥作と同様に、現在みることのできる形は世阿弥らの手をへたものであることは「小町、昔は長き能也。漕ぎゆく人はたれやらん」と云て、なをく謡ひし也。後は、其あたり玉津島の御座有とて、幣帛を捧げければ、御先と成て出現有体也。是をよくせしとて、日吉の鳥大夫と言はれし也。当世、是を略す。」と『談儀』にあることから明白である。私の疑問は、この記事とかかわって、観阿弥の原作がどういふものとみられるかにあ

る。このことは金井清光氏に「卒都婆小町」の作品研究があり（『能の研究』所収）、能勢朝次、小林静雄、野上豊一郎、戸井田道三各氏

の説を批判されて、「観阿の原作は能勢説のとおり現行「卒都婆小町」のシテ上歌・着ゼリフのあとに玉津島明神がみさきとなって出現する場面が加わっている長い能であった公算が大きい」として、「護法」型の演出であったことを示唆していられる。私も金井氏とおなじく能勢説に賛同するものである。すな

わち「漕ぎゆく人はたれやらん」はシテ小町の道行となっている上歌の最後の句であり、そこから「なをく謡」つたならば、道行はさらに延長されることになる。これがどの地点までゆくのか、現行のものから類推すると、日本古典文学大系『謡曲集』上がワキた

ちの道行のあとに「ワキの阿倍野（または鳥羽）に着いたという着せリフがあつて、二人は脇座に行き、着座する。地名はワキ方の流派で違う」とするすように、阿倍野とかんがえられる。能勢説はそうであつて、そこにおいて「小町が玉津島明神に幣帛を捧げる場面でもあったのかと思ふ」と推測されている。たしかに、鳥羽であっても詞章上は問題

のない所なのに、阿倍野というのは古演出の名残りかと判断してよいのかもしれない。

疑問がのこるのは玉津島の位置である。金井氏のように「阿倍野の松原に勧請してあつた」とみれば疑問は氷解してしまうが、これを和歌の浦にあつた本宮とみたらどうなるであろうか。鳥羽から淀川をこぎくだつていけば天王寺・阿倍野・住吉社・信太と熊野参詣の順路をたどつて玉津島にいたりるのである。そして、そこから東行すれば、ワキ僧の出身地高野山に到着する。

私は前稿において、『三国伝記』巻第十二六話「小野小町盛衰事」が弘法大師と小町のかかわりをとぎ、大師が小町の白骨を高野山におさめて回向したとすること、毛越寺延年の能「卒土婆小町」では、卒都婆問答の場が高野山になっていることの二点から観阿弥の能も最終の場を高野山としていたのではないかとうたがってみた。

同時代の説話における小町と高野山のかかわりのふかさを能の背景においてみると、現行の演出の中に、いくつかの不整合がみいだせるようにおもわれる。

1、ワキ僧の道行に着ゼリフは別にすれば途中に通過する地名も到着する地名もないこと。また上歌は「花月」ワキ僧の道行を転用したとみられ、本曲独自のものではないこと。

2. とりわけて小町にも高野山の僧にも所縁のなきような土地へ鳥羽または阿倍野Vで両者のかかりがはじまること。

3. 道の辺に「朽ち木」とみえる卒都婆があっても不思議ではないが、高野山中の方がより妥当であろうこと。

これらは一致してひとつの結論をさしめしてしよう。『申楽談儀』によってたしかな範囲でいえば、「玉津島に幣帛をさきぎ、御先鳥が出現する」という、風流の走り物の一段をきりのけたとき、具体的な地名がうしなわれたのだということである。

私の意見としては、それと同時に、卒都婆問答の場としての高野山、小町を教化する弘法大師（あるいは、そうみられる高僧）もまた消去されたとかんがえたいのである。そのかわりに創作されたのは「高野山より出てたる僧」による場面設定だったとみたい。「花月」からの道行の借用は、この時点でおこなわれたとみられよう。

復元した筋だてでは次のようになろうか。
(日本古典文学大系の表現をかりる)

1 シテの登場Ⅱ老女の漂泊(都から玉津島までの道行)。2 アイの登場Ⅱ小町の棒弊と御先鳥の教示(高野山で救済があることか)。

3 シテの道行Ⅱ高野山に到着。4 ワキ・シテの応対Ⅱ卒都婆問答、シテの勝利。5 シテの

告白Ⅱ小町の今昔の姿。6 シテの狂乱Ⅱ少将の霊のつき物。7 シテの狂乱の続きⅡ少将百夜通いの物語。8 結語Ⅱ高僧による救済。

こうしてみれば、まことに事おおき能であるが、狂言方も活躍し、背景となる説話におけるかんがえ方とも一致する点、観阿弥の特色があるといつてよいであろう。

現行の小町の「着キゼリフ」に「あまりに苦しい候ほどに、これなる朽ち木に腰を掛けて」というが、この「あまりに苦しい」も登山におけるものと解することができる。こういう点では毛越寺の延年能は示唆するところがおおい。金井氏は本田安次氏の説をうけて紹介され、「詞章に難語が多いところをみると近世の好事家の作かとも思われるが、詳細は不明である」とのべられている。これにしたがうのが無難であるが、復元したものと共通点をかんがえあわせると、案外原型にちかい部分を保持しているのかもしれない。最大の相違は延年能では、亡霊としての四位少将がはじめから登場していることである。小町に影のようにつきしたがっているとみれば現行曲でも登場可能とおもわれるが、これは延年能で、よりわかりやすくするための流動であったとみることもできよう。

八一九八一・一・二七V
へたぐちかずお 静岡英和女学院短大教授V